

布をめぐる一喜一憂

東京大学教授 木下直之

PLEASURE AND ANXIETY OVER PIECES OF CLOTH

Naoyuki KINOSHITA, Professor, University of Tokyo

Naoyuki Kinoshita told dramatic stories in which underwear played an essential role, while introducing various historical anecdotes concerning underwear.

Mr. Kinoshita started his talk with historically known accounts associated with underwear in modern Japanese history. In 1924, a telegraphic engineer stole a piece of waistcloth (which used to be common female underwear). Mr. Kinoshita discussed this incident from the viewpoint of fetishism, conceptualized with the development of sex science. He also mentioned the case in which governmental authorities covered the private parts of a naked woman in a painting by Seiki Kuroda (1901), asserting that leaving those parts exposed would disturb public morals. Mr. Kinoshita described how pieces of cloth started to appear in the paintings of naked women painted thereafter, to cover their private parts.

Then his talk shifted to Europe. Mr. Kinoshita introduced *fundoshi* (loincloths) exhibited at the Royal Norfolk Regimental Museum, Norwich, England. They had belonged to British soldiers who became prisoners of war after the Battle of Singapore and were sent as forced laborers to build the Burma Railway, also known as the Death Railway. They self-mockingly called the garments *japhappys*. Mr. Kinoshita also quoted a story from one of the author Mari Yonehara's books, in which she introduced women's recollections of an underwear exhibition held at St. Petersburg, Russia. Finally, Mr. Kinoshita mentioned a white chemise displayed at the product museum of a Japanese underwear manufacturer. The chemise was purchased 30 years ago, used by both a mother and daughter, and returned to the manufacturer, with a message of gratitude.

股間若衆

という紛らわしい、本屋で口に出しては注文しにくいタイトルで、ひとが股間をどのよ

うに隠してきたのかを論じた本を三年前に上梓した。

その本はロシア語通訳で知られた米原万里さんに捧げたつもりだった。「イチジクの葉っぱはなぜ落ちなかったのだろう」という一章ばかりか、「パンツとズロースの相違」や「イエス・キリストのパンツ」などなど、たくさんの疑問を収めた米原さんの『パンツの面目ふんどしの沽券』（ちくま文庫、2008年）は、拙著と関心を完全に共有していたからだ。

「毛むくじゃらの猿人「ルーシー」から見れば三百二十万年後のわれわれは、股間にわずかに残されたちぢれ毛の有無をめぐる、一喜一憂を繰り返してきたのである」。そんな話をいっしょにしてみたかったなど本文中に書いたものの、残念ながら、米原さんはすでにその六年前に世を去っていた。だからというわけではないが、米原さんの盟友、イタリア語通訳で知られるシモネッタこと田丸公美子さんが推薦文を寄せてくれた。かくして拙著には「男の沽券にかかわる本！」と記された帯が巻かれた。この帯を少しずり上げると、表紙の男性裸体像の股間がうまい具合に隠れて、腰巻を巻いたようになる。わざわざそんなふうにして店頭で平積みしてくれた本屋が京都にあったと聞いた。

同じ京都の京都服飾文化研究財団から、下着について書くようにという、これまたありがたい、いやありえないお話をいただいた。瞬時になぜか腰巻が頭に浮かび、それなら書けるような気がしてお引き受けし、書き出してすぐに後悔した。下着の世界は奥が深く、まるで底なし沼にずぶずぶと足を踏み込んでいくような気がした。

そもそもどこからが下着でどこからが上着なのか。いや、下着の対になる言葉は、上着でよいのか。上着の上には上半身限定、垂直方向での上という意味も加わってくるではないか。それに下着の上にも上着の下にも、ひとはいろいろと着込んでいるような気がする。

下着は身体に直に接する衣類だと限定したところで（肌着という言葉はまだ死語ではなさそうだが）、いかようにも定義できる。時代によっても、土地によっても、老若男女によっても、かたちも材質も名前も役割も異なる。米原さんのいう「パンツとズロースの相違」どころか、おむつ、猿股、股引、回し、ふんどし、下帯、下穿き、パンティ、ショーツ、ブリーフ、トランクス、ボクサーパンツなど、股間を包む布だけでもいくらかもある。そのうえでやっぱりいなことに、下着と聞いて思い浮かべるものがひとによって異なるのだ。

おそらく腰巻は、股間を前後にも覆うふんどしやパンツよりもはるかに原始的な下着だろう。日本列島に住む女たちががパンツを穿き出すのは「1930年代後半から50年代にかけて」、「洋装化の浪にそって浸透していったのだろう」（井上章一『パンツが見える。』朝日新聞社、2002年）というから、気が遠くなるような長い服飾の歴史から見れば、たかだか7、80年、つい最近のことだ。もっとも、腰巻ひとつでの暮らしがあれば、それは下着であると同時に上着でもある。いや下着でも上着でもなく、からだにまとう布としかいいようがない。

ひとがいつから布をまとうようになったのかに関心がある。しかし、どんな服飾史の本にも、答えは書かれていない。石器や土器と異なり、有機物たる布は残らないからだ。近年、グルジアの洞窟からおおよそ 34,000 年前の亜麻繊維が発見されたという（『サイエンス』2009 年 9 月 10 日）。それは顕微鏡でようやく確認できるような代物だった。古代エジプトのミイラを包んだ布となると、せいぜい紀元前 4,500 年ぐらいまでしかさかのぼれない。

布の発明にいたるまでに、毛皮や樹皮、蔓や植物繊維などを利用したこれまた気の遠くなるような長い時間が流れたはずだ。その意味では、アダムとイブが身につけたイチジクの葉っぱは、歴史的事実ではないにせよ象徴的な意味はある。したがって、それが「なぜ落ちなかったのか」という米原さんとわたしの問題提起は、紙を恐れぬ行為だろう。だが、今回は葉っぱではなく腰巻を思い浮かべてしまったのだから仕方がない。まずは、ある腰巻事件の話からお話ししよう。それはつい最近、ほんの百年ほど前のことだ。

女の腰巻二百五十本

「賊を働いた電信隊の技手」

春三月以来中野署管内で新婚者及年頃の娘のいる家に忍び込み腰巻長襦袢を窃取する者があるので同署で犯人厳探中、犯人は名感も電信隊無電技手山下豊（三一）とわかり十四日夜九時高円寺五〇三の自宅で捕へた、同人は四月二十二日高円寺大住鉄太郎方に忍び入り衣類十数価格二百五十円を窃取した事を自白したか同署員が臨検すると押入の中から腰巻二百五十余本を発見した、同人は本月一日付で解雇されたものである。（『読売新聞』1924 年 7 月 16 日付）（Fig. 1）

たまたま目にしたこの記事、いつの時代にも下着泥棒はおり、いったんこの道にはまったら最後、際限がないものだと感心し恐怖を覚える一方で（インターネットで目にした最新ニュースでは、中国のある下着泥棒の自室の天井がその裏に隠した下着 2,000 点の重みできしみ、ついに破れた写真が配信されていた）、だけど腰巻って、単なる紐をつけた布切れなんじゃないのかと呆れた。

いやいや、「新婚者及年頃の娘」の腰巻に限って集めたのだから、山下技手にとっては断じてただの布切れなどれはなかった。既婚数十年の中年女や老婆の煮染めたようなネルの腰巻（わたしが子どものころにはそんなものが干してあるのをよく目にした、というより思わず目を逸らせた）には手を伸ばさなかった。だから蒐集には筋を通している。それなりに苦労も危険もあっただろう。それに優る喜びが、入手し、所持し、おそらくは顔を押し付けたり、自らのからだにまったりした時があったにちがいない。そうして集めた腰巻 250 本は、中野署員が

押入の襖を開いたとたん、哀れ山下技手が誰に見せることなく築き上げた世界から、再びこの世へと戻ってきたのである。

いつの時代にも下着泥棒はいる、と書いたものの、縄文時代にはたぶんいなかっただろう。ならばいつからか、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、戦国時代、と考え始めると終わらなくなる。さっぱりわからない。下着泥棒にではなく、下着泥棒をしたことがある歴史家にでもなく、下着泥棒史を専攻する研究者に会っていろいろと尋ねてみたいものだ。

下着泥棒というカテゴリーは日本社会の中に、いったいいつ成立したのかと。もちろん、他人の衣服を盗む行為は古くから罪悪視されただろう。しかし、山下技手の犯罪は、単なる窃盗なのか、それともすでに下着泥棒として認知されていたのか、新聞記事だけでは判然としない。

もちろん、現代では、下着泥棒は窃盗罪や住居侵入罪であるばかりではなく、フェティシズムの一種として受け止められる。変質者をさらし者にするように社会的事件としても扱われ、警察によるメディア向けの押収品公開などは様式化され、一種の下着展示会と化している。これまたインターネット情報によれば、千葉県警の展示技術はとりわけ磨きがかかっているらしい。

日本でのフェティシズムの理解は、ドイツの性科学者クラフト＝エビング Kraft-Ebing “Psychopathia Sexualis” (1889年)の翻訳日本法医学会訳述『色情狂篇』(春陽堂、1894年)に始まったとされる。エビングは「色情的の關係に於て知覚過敏及び不全麻痺となりたる者にして其脊髓中枢薄弱となり刺激を受け易く或は進みて陰萎症に罹れる者」のひとつに「フェチシステン」を挙げ、「婦女子の履、婦人の襦袢を抱て、以てその情欲を泄し快味を買うものにして、之れが為めに屢々盜奪をなすに到ものとす」と説明する。

以下、履(すなわち靴) フェチ、夜帽(すなわちナイトキャップ) フェチ、襦袢・股引フェチ、前垂(すなわちエプロン) フェチ、毛皮フェチなどの実例がつぎつぎと紹介される。そのうちのつぎの事件は山下技師のそれにそっくりである。

千八百七十六年七月偶々一館内より一婦人の襦袢を盗みたるの故を以て引致せられたり、而て患者の居宅を搜索せしに、三百個の化粧品を隠匿し、或は襦袢あり、股引あり、夜帽あり、或は靴足袋あり、且つ患者の引致せられしときの如きも尚一婦人の襦袢を肌に着せり、自白するところによれば、既に十三年以来婦人の襦袢を盜奪するの瞬間を於て云ふ可からざる愉快を感じ制せんとするも殆ど制す可からず

いくら下着について書くように頼まれたからといい、何も下着泥棒の話から始めることはないかと躊躇しつつも（まさしく制せんとするも殆ど制す可からず）、こうした行為は下着が実用品であることを超えて別のものへ、単なる布切れを超えた別のものへと変身することを象徴していると思うのだ。それは下着がもっとも身体に近い布であることに起因しているからだろう。

高橋鐵は『アブノーマル』（河出文庫、1993年、原著は『変態性欲論』千代田社、1950年）で、「肌着フェティシズム」という一節を立て、柳里恭こと柳沢淇園の随筆『ひとりね』（1724年）の「十三の時に唐学を学び、今二十一の暮まで覚えし学問、惚れし太夫の下帯とりかへにしたし」を紹介し、さらに「うたたねの足へ燃え附く緋ぢりめん」や「緋縮緬衣に縫はれ口惜しき」といった古川柳を何句も挙げているぐらいだから、下着に対する執着はフェティシズムという言葉を知る前から日本社会にも当然あった。下帯フェチ、緋縮緬フェチと言わなかっただけの話である。

しかし、いったんフェティシズムを受け入れてしまえば、それからは「物件恋愛」（榎保三郎）、「性的心酔」（増田一郎）、「淫物症」（古畑種基）などの日本語がつぎつぎと充てられる（前掲『アブノーマル』）。先のエビング『色情狂篇』は刊行後すぐに発禁となるが、1913年になって、『変態性欲心理』と書名を変えて大日本文明協会から再版された。そして、「変態性欲」は山下技師が大活躍（？）した1920年代に流行語となる（菅野聡美『〈変態〉の時代』講談社現代新書、2005年）。

「性欲」という日本語が使われ出すのも19世紀末のことである。それは人間を突き動かす力であり、この現実から目を反らすべきではないと考えた、文学者ならゴンクール兄弟やフロベール、画家ならばクールベやミレーらの仕事がフランスから伝わってきて、「自然主義」と呼ばれることになる。「性欲すなはち劣等な色気」と、森鷗外にいわせれば身もふたもない。1896年という早い時期に書いた「月草叙」（『鷗外全集』第23巻、岩波書店、1973年）の中で、やはり鷗外はクラフト＝エビングの名前を出して、「自然主義といふなの附いた一種特異な産物」をこんなふうに語っている。

人間の動物的な側を誇張して、性欲すなはち劣等な色気を行為の唯一の原動力にしたやうな人物を写すのは、いはゆる病理を詩の種に使ふのだ。かういふ類の詩の出た来たのは、伊太利のマンテガッツァ、独逸のクラフト・エビングなどの医学上の論説が詩の境にはひつたからだ。たとひ病理にまではならぬ、まだ生理の中に立ち留まつて居る様子があつても、それは男女の間がらを糞と蜜の混合物と看做して居るに過ぎないのだ。

やがて、島崎藤村が『破戒』(1906年)を、田山花袋が『蒲団』(1907年)を著して、日本にも自然主義文学が登場した。しかし、「糞と味噌」ならぬ「糞と蜜」とまで表現する鷗外の評価は手厳しい。人生を何につけても性欲と結びつけてしまうことに疑いをはさみ、では「一つのおれの性欲の歴史を書いて見ようかしらん」と考えて発表したものが『キタ・セクスアリス』(1909年)であった。そして、それを掲載した雑誌『スバル』同年7月1日号はたちまちに発禁処分を受けた。

その前書きにあたる部分で、鷗外は前年に起こった出歯亀事件を引き合いに出した。ある出歯の植木屋職人池田亀太郎は、女湯の覗き見が趣味で、あるとき湯屋から変える女のあとをつけて強姦殺人に及んだ。こんな「どこの国にもたくさんある、極て普通の出来事」が、「一時世間の大問題に膨張する。所謂自然主義と聯絡を付けられる。出歯亀主義という自然主義の別名が出来る。出歯という動詞が出来て流行する」と評した。

もし山下技手の犯罪が20年早ければ、あるいは腰巻事件と呼ばれ、腰巻主義という自然主義の別名が出来たかもしれない。いや、『蒲団』の幕切れは、すでにそれを地でいっている。主人公竹中時雄は去っていった女弟子の「夜着の襟のビロードの際立って汚れているのに顔を押し付けて、心のゆくばかりなつかしい女のおいをかいだ。性欲と悲哀と絶望とがたちまち時雄の胸を襲った」。小説はそこで終わり、竹中の行為は何ら咎められなかったものの、ここでも、からだにまとう布が大きな役割を果たしている。むしろ、この際立って汚れた布から日本の自然主義文学は始まったというべきかもしれない。

絵を布でおおう

さて、ようやく下着泥棒に別れを告げて、つぎなる腰巻事件に話を進めることができる。黒田清輝の裸体画をめぐる一連の出来事は、性欲が社会問題として浮上してきた時代の中に理解する必要があるようだ。いや、それは鷗外が「月草叙」と『キタ・セクスアリス』を書いた1896年と1909年の間にすっぽりと収まっているのである。

世にいう腰巻事件は1901年に起こった。この年の秋に東京上野公園で開かれた第6回白馬会展に黒田が《裸体婦人像》(静嘉堂文庫美術館蔵)(Fig. 2)を出品したところ、警察が介入し、画面の下半分に布が巻かれた(Fig. 3)。同年10月20日付の『都新聞』が、その事情を伝えている。

吉永下谷署長臨検のため同会へ出張し来り、陳列の作品を一覧し、裸体に関するも

のを見るより風教上差支あり、且つ観者の実感を挑発するの虞あれば、局部を露出せしめざるやうにせよと注意を与えれば、同会にてハ直ちに其注意に従ひ、紫色の中を持ち来りて局部に覆ひを施したり」

ところが、今度は布をめくって見ようとする者が続出したため、10月24日になってさらに板囲いが加わった。そして、そのまま最終日まで展示され続けた。新聞各紙はこぞってこの問題を取り上げた (Fig. 4)。多くは警察の芸術に対する無理解を嘆き、布で覆わせた措置「局部隠蔽法」(『毎日新聞』10月25日付)を難ずるものだった。

その中であって、11月8日付の『読売新聞』が警視庁の方針を比較的詳しく報じている。それによれば、警察は裸体画を全面的に禁止するわけでも裸体美術に反対するわけでもない。一般の風紀に及ぶ関係から取り締まらざるをえない。なぜなら、社会には「教育の無い人も技芸の考への無い人も沢山居る」からだという。そのような「観者の実感を挑発するの虞」(前掲『都新聞』)が問題となった。「獸欲的発情」(『中央新聞』10月31日付)と呼んだ記事もある。これら「実感」や「獸欲的発情」が、やがて「性欲」という言葉に取って代わられるようになる。

しかし、黒田の裸体画が風俗壊乱を理由に問題視されたのは、この時がはじめてではない。黒田は1893年にフランス留学から10年ぶりに帰国した。携えて戻った滞仏作《朝牀》(1945年に戦災で焼失)が1895年に京都で開かれた第4回内国勸業博覧会に出品された時、同じ理由で論争を引き起こした。その時は新聞や雑誌が論争を煽ったのであり、警察は何も動いていない。

それから6年後の警察の介入には、1900年に制定された治安警察法が大きく関わっている、その第16条は、公然と掲示された図画が「風俗ヲ害スルノ処アリト認ムルトキハ警察官ニ於テ禁止ヲ命スルコトヲ得」としたからだ。これによって、先の『都新聞』が報じたとおり、下谷警察署長は「臨検のため同会へ出張」し、展示を禁ずることができたのである。

治安警察法はもともと政治運動や労働運動の規制を主な目的としたが、ここでいう治安には風俗の維持も含まれていた。人間の原動力のひとつに性欲があるとされれば、国民の性欲のコントロールまでもが警察の担う仕事となる。この姿勢は今日にまでつづいている。

それまでに風俗壊乱の罪を問われたものは、もっぱら版画や雑誌挿絵など印刷物の頒布であった。警察は、印刷物の普及が世の中に害毒を流すことを恐れたからだ。したがって、美術展会場に一点ものの裸体画が展示されるという事態はまったくの想定外だった。黒田

がもたらした新たな事態に、取り締まる法がようやく追いついたということになる。ただし、警察が問題視したのは裸体ではなく局部の露出だった。この点が、発禁処分される印刷物と決定的に異なる。裸体画を撤去させるのではなく、局部を布で覆いさえすればそれでよしとしたのは、そこが性欲と密接に関連した場所だと見なされるようになったからだろう。それは身体の特定の器官や部位というより、もっと漠然とした観念的な場所である。

しかし、絵の「局部」を布でおおわせるという警察の措置は、いくら新聞で批判されようとも効果覿面だった。それからというもの、白馬会に出品された裸体画の人物は、はじめから腰巻を着けた姿で絵の中に現れたからだ (Fig. 5)。大半はぼやけた写真図版しか残っていないが、黒田《春》と《秋》、岡田三郎助《花の香》と《微風》、藤島武二《諧音》などを見ると、腰に布をしっかりと巻きつけたものは少なく、まるで羽衣のような曖昧な布が曖昧なかたちで、局部というか下半身のあたりにまとわりついている。「腰巻はなぜ落ちなかったのか」という新たな疑問を呈したくなるが、警察の指示も画家の対応もどちらも非現実的、観念的だからであり、したがってそこには万有引力が働かないという答えしかないだろう。ここにも、からだにまとった布をめぐる一喜一憂がある。

展示されたふんどし

腰巻という紐をつけた布切れの話ではじめたから、同じく布切れに紐をつけただけのふんどしの話で終わろうと思う。

イギリスにノリッチという古都がある。ロンドンから北東に向かう列車に乗れば2時間ほどで着く。中世から羊毛産業で栄え、16世紀にはイングランドでロンドンに次ぐ都市だったが、産業革命に乗り遅れた。町の中心は城で、小高い丘の上に今も聳えている。博物館として開放され、いつでも見学することができる。イギリスの地方博物館は、その土地の自然と歴史と文化を総合的に伝える施設が多く、したがってそこから送り出した軍隊の歴史も展示には欠かせない。

ノリッチの博物館の戦争コーナーには、ふんどしとパンツが展示されていた (Fig. 6)。その面目と沽券は如何に？ いったいどんな評価が与えられて、展示物と化したのか。

ふんどしは「japhappy」と名づけられていた。シンガポール陥落で日本軍の捕虜となった英国軍兵士たちが、1943年の泰緬鉄道建設 (Death Railway と呼ばれ、のちに映画「戦場にかける橋」1957年がつくられることになる) で強制労働された際に身につけていたものだという。灼熱下での過酷な労働が始まると、軍服はすぐに破れてぼろぼろになり、破棄するほかなかった。代わりに、誰もが日本兵のふんどしを真似てつくられた最小限の布切れを身にまとった。

誰かが自嘲気味に、それを「japhappy」と名づけた。工事が完成すると、再びシンガポールの捕虜収容所に送られ、そこで1945年8月の終戦までを過ごした。解放された時、ふんどしひとつの捕虜たちは、まるで生きた骸骨のような姿で写真に写っている。

一方緑色のパンツはオランダ軍の軍服を改造したもので、強制労働からの解放、スポーツ大会や演劇公演などが許された収容所での日々を伝えるものと説明されていた。ふんどしと異なり、手が込んでいる。何より洋風である。

ふんどしとパンツをわざわざイギリスにまで持ち帰ったのは別の人物らしい。捕虜収容所での経験が、ふんどしとパンツに付されたそれぞれの解説ほどに違うとは思えない。むしろ、忘れがたい屈辱が汚れたふんどしに担わされたと考えるべきだろう。

『パンツの面目 ふんどしの沽券』で開口一番、米原万里さんはサンクトペテルブルク国立歴史博物館で開かれた「身体の記憶—ソビエト時代の下着」展（2000年11月7日—2001年2月末）を紹介する。主催者は同館とゲーテ・インスティテュート、これに下着メーカーのTriumphが後援した。

企画者は下着にまつわる思い出を無名の女性たちから集めた。それを会場に掲示し、カタログにも掲載した。米原さんはこれらの思い出を食い入るように読み、傍線を引きまくって。孫引きになるが、そのひとつをここに示そう。

彼の部屋のベルを押す前に、大急ぎで着替えた。冬仕様の長いブーツを履いたまま、分厚い不格好な毛糸の股引を脱いで、綺麗な（と当時のわたしには思えた）ポーランド製のパンツに足を通した。レースの縁取りが付いたナイロン製で、五ループもした代物。奨学金のお金で買ったの。その頃は空色だった。でも、そのときの恋と同じで、色は長持ちしなかった。

それから何年も経ってから、全く違う男と結婚していたわたしは、ある朝、目が覚めて、ふと自分がまだそのときのパンツをはいていることに気づいた。すでにネズミ色になっていて、昔レースが付いていた縁は、端切れで繕ってあった。（傍線米原）

米原さんは、何人かの思い出を読んで、「年頃の娘さんが大切な人に見られるのを死ぬほど恥ずかしく思っているのは、生殖器ではなく、それを覆い隠すパンツ（の醜さ、格好悪さ）の方みたいなのだ」と見抜いた。ただし、米原さんが「股引」と「パンツ」と、結構強引に訳してしまったロシア語のニュアンスまでは、わたしにはわからない。

下着は身体に密着する衣服であるがゆえに、ひとの暮らしや人生に忘れがたい思い出を残す。それらが集まれば、ある時代の社会や文化をも写し出す。こうした下着の展覧会を、

イギリスやロシアの博物館ばかりに任せず、日本の博物館もぜひ実現してほしい。

その意味で、ワコール本社1階に開設されたミュージアム・オブ・ビューティは下着を展示する希少な博物館である。最初の展示物は創業者塚本幸一のノートであり、つづいて最初の製品ブラパット（1949年）に添えられた「初心忘れるべからず」という言葉だから創業者の思い出に始まるといってもよいかもしれない。暗い展示室内に青いトルソが11体並び、1951年から現代までそれぞれの時代のブラジャーを身につけている。それを見終わった先に、まるで祭壇のような展示がある。広げられた白いスリップの上に手紙が置かれ（Fig. 7）、そこにはこんな文章が記されていた。

高校卒業後すぐに店を忙しく手伝っていました。月1回の休みとほんの小遣いしかもらっていませんでしたので、貴社の下着は私の夢でした。……大切に大切に時々しか身につけず、月1回の定休日だけ着けたのでしょうか。とにかく大切に、21才で嫁ぐ時も持ってゆきました。……次女が例のスリップに目をつけました。なんとレースがアンティークぽくて良いのだそうです。それで大切な30年もの？（ワインみたい）のスリップをその娘にあげちゃうことにしました。

「30年もの！」というだけでもすごい話だが、さらにこの母子が凄いのは、里帰りした娘のスリップを、なにひとつ変わっていないと脱がせ（もちろんそのあとで洗濯をして）、ワコール本社に送りつけたことだ。欠陥商品を送りつける行為は珍しくないが、これはその真逆、非の打ち所のない商品を生まれた場所へ、思い出を綴った手紙を添えて奉納したのである。

展示物は聖遺物と化し、博物館は神殿の様相を呈する。白いままの日本製スリップと空色からネズミ色へと変わった数年もののポーランド製パンツとでは大違いだ、下着を前にして、どちらからも人生に思いをめぐらすことができる。それにしても、からだにまとう布切れに、なぜかくも一喜一憂するのだろうか。

〈図版〉

Fig. 1. 1924年7月16日付『読売新聞』

The Yomiuri Shimbun, 16 July 1924.

Fig. 2. 黒田清輝《裸体婦人図》1901年 静嘉堂文庫美術館所蔵 ©静嘉堂文庫美術館イメージアーカイブ/DNPartcom

Seiki Kuroda, *Portrait of a Nude*, 1901. Collection of the Seikado Art Bunko Museum. ©The Seikado Art

Bunko Museum Image Archives/DNPartcom.

- Fig. 3. 腰から下を布で覆われた黒田清輝の女性裸体画 『明星』第17号 1901年11月15日刊行 日本近代文学館所蔵 写真提供=芸術新潮
Cloth-covered painting of Seiki Kuroda, *Myojo*, vol.17, 15 November 1901. Collection of the Museum Modern Japanese Literature. Courtesy of Geijyutsu Shincho.
- Figs. 4. 1901年10月21日付『時事新報』(上)と1901年11月19日付『二六新報』(下)
Jiji Shimpō, 21 October 1901 (above) and *Niroku Shimpō*, 19 November 1901 (below).
- Fig. 5. 和田英作《こだま》 1903年 泉屋博古館分館所蔵
Eisaku Wada, *Kodama*, 1903. Collection of the Sen-oku Hkukokan.
- Fig. 6. 王立ノーフォーク連隊博物館における戦争展示
War-related exhibits including undergarments at the Royal Norfolk Regimental Museum.
- Fig. 7. ミュージアム・オブ・ビューティ (ワコール本社1階)で展示されているスリップ
Slip exhibited at the Museum of Beauty in the Wacoal head office.

木下直之 (きのしたなおゆき)

1954年、静岡県生まれ。東京大学教授。専門は美術史・文化資源学。19世紀日本の文化を美術・見世物・祭礼・建築・博物館・動物園・戦争などの観点から研究している。主な著書に『美術という見世物』(1993年、平凡社、サントリー学芸賞)、『写真画論』(1996年、岩波書店、重盛弘淹写真評論賞)、『わたしの城下町』(2007年、筑摩書房、芸術選奨文部科学大臣賞)、『股間若衆』(2012年、新潮社)、『戦争という見世物』(2013年、ミネルヴァ書房)、『銅像時代』(2014年、岩波書店)など。

(※肩書は掲載時のものです)